

動機づけ研究は役立っているのか？

— 私なりの答えをいくつかの観点から —



2014年10月25日(土) 14:00～
名古屋校舎 講義棟 L804 教室
講師：明治大学准教授 廣森友人

廣森先生は外国語学習における動機づけ研究を積み重ねてこられた。その廣森先生の講演タイトルは「動機づけ研究は役立っているのか？」という反語的なものであったが、「役立っていると思いたい」というのが先生の本音で、その理由を示されてから、動機づけについての具体的な話に入られた。

動機づけには、motive(ある行動の目標や目的)・motivation(ある行動の目標や目的の強さ)・motivate/motivating(ある行動への働きかけ)という3つの側面があることを示し、研究例から分かる動機づけの変化プロセスとその原因・理由について具体的に紹介された。



そこから言えることは、「動機づけを維持／向上させるためには、言語・文化に関する興味・関心など、多様な動機にバランスよく支えられた方がよい」ということである。

そして、人を「動機づける」要因として、自律性(自ら選択したい、行動に責任を持ちたい)・有能感(やれば出来るという期待感・達成感を持ちたい)・関係性(周囲の他者と協力的・協調的関係を持ちたい)という3つの心理的欲求があることを示された上で、聴講者にバトンを渡された。

すなわち、英単語20語を示され、それらを上記3つの要因を取り入れて学習者に学習させるためのデザインを聴講者に4人1組で検討するよう指示されたのである。数人から報告を求められた後、先生自身のデザインを紹介された。

さらに、外国語学習におけるインプットからアウトプットへの認知プロセスを示されてから、最後に、学習者の多様性を踏まえることが重要であることを指摘された。

中身の濃い、興味深い講演であった。

(文責：田川 光照)

